S-03

心尖部アプローチによるTEVARの３例

【目的】近年様々な胸部大動脈の病変に対してretrograde approachからのTEVARが行われているが、アクセスの不良例や上行大動脈の病変への治療などで心尖部アプローチからTEVARを行ったので報告する。【方法】３例に心尖部アプローチを行った。いずれも耐術能が乏しく、開胸手術はhigh riskと評価された。心尖部アプローチを選択した理由は、１例は上行大動脈のULPに対する治療、他の２例は下行大動脈に豊富な粥腫を認める弓部大動脈瘤で、retorograde approachによる塞栓回避であった。いずれの症例も、chimney graft＋carotid-carotid bypassにより頸部分枝を再建し、Zone 0からステントグラフトを留置した。頸部分枝に送血する事で、頭頸部への塞栓予防と循環補助とした。【成績】心尖部の止血は容易であった。１例で術中ARの増強を認めたが、循環補助により安定した循環を維持できた。ワイヤー抜去後にはARは消失した。１例を頸動脈の解離による脳梗塞で失ったが、心尖部アプローチに起因する合併症はなかった。他の２例は手術室にて抜管し、神経学的以上、塞栓症を認めなかった。【結論】極めてhigh riskな症例に心尖部アプローチからTEVARを３例に行った。１例を失ったが、他の症例は大きな合併症もなく術後速やかに回復し、TEVARの有用性が実感できた。